

序——歴史はそのつど現在が作る

飯島宗享

時は多くのものを変える。しかし時が容易に変ええないもの、変わらないものをも、時は示す。また時は、不可逆的ではあるにしても、しばしば回帰的に変えることもする。時がと云うが、その多くは時にあつて人が変えるのである。

百年の歲月は創立時の哲学館を今日の東洋大学に変えた。その間のさまざまな出来事、曲折の足跡は、一八八七年——一九八七年の間の日本と世界の波瀾に富む推移、人々の知見、感覚、ものの見方・考え方の変遷にともなわれている。この激動の百年の時に耐えたということは、それだけでも慶賀に値いすることであり、大学を挙げてこの節目を祝いたい。

他面、その百年が変わらない何を東洋大学において明示したかとなると、いささか心もとない。事情は諸大学とも同様である。それぞれの大学に学祖があり、建学の精神と称されるものがあるが、おおむね空疎化して今日の大学の実状はいずれもそれを証示してはいない。巨大化がこの空疎化を招いたのである。大学は企業とは異なり大きくなることが必

ずしもよいことではない（いや、企業も同じかもしれない）。空疎化されてならぬものであれば、大衆化を余儀なくされた大学がそのなかでこれを実質化する工夫をどう進めるかが今日の課題となる。

歴史はそのつど現在が作る。現在の人々が作る——前方に向ってだけでなく、後方に向つても。過去の知られた事実への現在の意味付与において歴史は成り立ち、それを教訓とする同じ現在の意味付与において踏み出される未来への歩みが歴史となるからである。伝統もそうである。東洋大学は第二世紀入りを控えた大きな節目の今、その歴史と伝統の大枠を作り証示する又とない時に際会している。客観的情勢も有利と思われる。

こう考えるとき、改めて学祖円了博士の志と教育理念を思う。明治二十年の時勢とその時代の人である彼と、昭和六十二年の今の時勢とわれわれとの間には、否むべくもないあらゆる違いがあるにもかかわらず、幸いにもそれを越えて、学校・社会・家庭教育を通じて在野の教育の事業を生涯の使命とした彼の教育理念のうちには、われわれの共鳴を呼びおこすものがあり、大学の歴史と伝統に定位するにふさわしいと思われるものがあるからである。

昭和六十二年一月